

さ〜〜。中は菊五郎引一人で當てる、引えらい膽きんちやと引いうれいは、よい〜〜引、アゑつさ〜〜。

角三段目

千草結びの引その物語りよ。聞いて互に引嬉し顔。よい〜〜引、アゑつさゑつさ〜。

角で評判引ばいぎよくりくわんよ引やりのでんしゆは引ふたりとも。よい〜〜よよい引、アゑつさ〜。



天智天皇 先出たの跡から出たの差別なく我懐の中につれつゝ  
 持統天皇 客過ぎて薪をきらし柴刈て急にほすてふあわてたる宿  
 猿丸太夫 施行を邪魔の道踏分て行きしかど廻りをしたと聞ぞ悲しき  
 山邊赤人 門の口に立出でて見れば白き笠阿波の徳島御蔭はじまり

御蔭耳目第二 おかげ百人一首上



蟬 九 これや此行くも歸るも分るゝも子持と錢の有無しによる  
 參 議 篁 伊勢路から熊野へかけて立出んと暇は告げよ乳母も道連れ  
 陽 成 院 つく餅の下に杵置く暇もなしちぎるも遣るも汗になりけり  
 中納言行平 立別れ參つた日數すでに立ちま少ちつとしたら皆歸りこん  
 在原業平朝臣 雨は降る合羽は持たず立つた故肩首筋へ水かゝるとは  
 藤原敏行朝臣 住の江の岸を眞直まっすぐ大坂へお蔭通ひ路人はよけなん  
 伊 勢 今年杯おかげ来うとは知らざりし阿波で此頃過してよとや  
 元良親王 迎もなら今から同じ連あらば家内連れでも行かんとぞ思ふ  
 索性法師 今こんと云て其儘いで来て有る丈の金を持出でつるかな  
 文屋康秀 来るからにでも怪しからぬ拔參實にお蔭とは今年を云らん  
 大江千里 宿に著きてうらむき難儀悲しけれ我身獨の女にあらねど  
 菅 家 此度は醫師も取敢へず拔參り病家少なき暇のまに〜

三條右大臣 子さへ負はト大方山は越えぬべし人に押れて苦しうもなし  
 源 宗 干 槇の尾は扱も淋しさ増さりけり人をも猫もこぬかとぞ思ふ  
 凡河内躬恒 心當に持たばや路用持つ人はおき惑はずにすつと行きける  
 坂上是則 荒物屋有りたけの杓と見るからに在所も郷もくれる菅笠  
 吞道列樹 邂逅たまたまに金を厭はぬ參りでもはがれもせぬは宿屋なりけり  
 紀 友 則 何方も盛り長閑けき春の日に見る人もなく花の散るらん  
 紀 貫 之 人は今心もちらず伊勢參りはまや野行きをする者も無し  
 中納言朝忠 錢金のたえてしなきは長々と日數も身をも構はざりけり  
 謙 德 公 戲を云ふべき人は道すがら身の惡戲いにくげを爲しぬべき哉



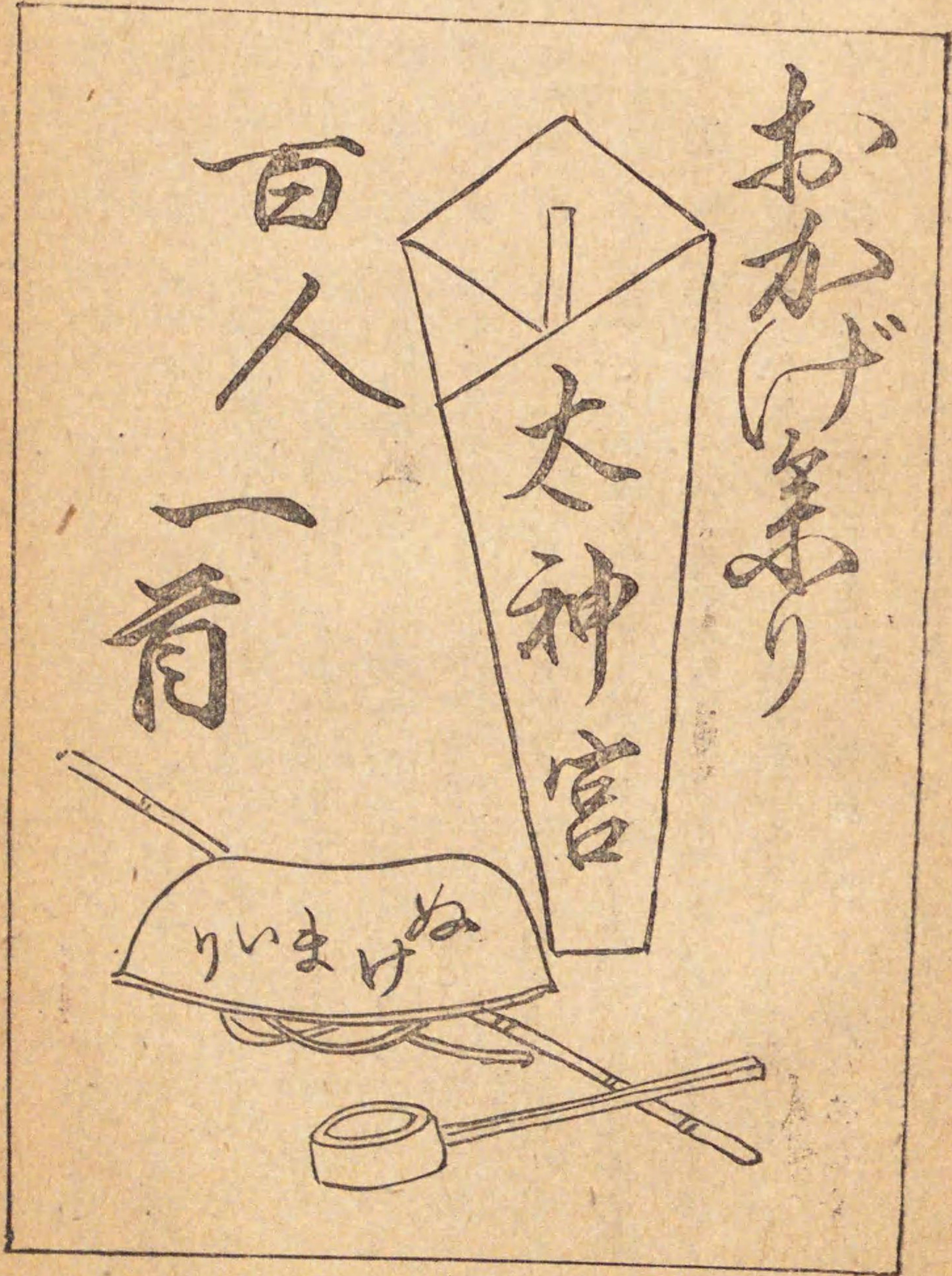


源 重 之 足を痛め連の中にて己のみおくれて跡へ遅うくる哉  
 大中臣能宣 昔より伊勢へ著く日は宮巡り内は内にて物をこそ祝へ  
 藤原通信朝臣 施しは呉れる物とは知りながら猶恥かしきおとなしほかな  
 右大將道綱母 連なしに獨り來るのが扱參りいはゞ淋しきものとかはしる

大納言公任 酒の事は絶えて久敷たべね共高うて飲めず飲みたうもなし  
 藤原義孝 御蔭とて久しからざりし錢儲け長くもがたと嘸思ふらん  
 于内親王家紀伊 人に聞き探して泊る報謝宿御蔭じや故に泊めもこそすれ  
 源俊頼朝臣 勞れける人は初瀬の山よりも吾も若くば戻らぬものを  
 崇 徳 院 足早め心急かるゝ後れ馳せ何でも連に逢はんとぞ思ふ  
 後徳大寺左大臣 施しを爲しつる方を眺むれば有るだけ遣つて塵ぞ残れる  
 道 因 法師 思ひあひ扱も子持もある物をお氣の弱いは戻るなりけり  
 皇太后 大夫俊成 世の中よ道こそ歩け錢入らず山の奥にも宿はするなり  
 待賢門院堀川 探されん所も知らず迷ひ子のはぐれて親は物をこそ思へ  
 藤原清輔朝臣 參るならまだ此頃は早からん今少と待つたら道もすきなん  
 俊 惠 法師 道すがら物問はいでも行くやうに道中記をば遣るは何がし  
 式子内親王 たゞ吞めと接待はあれど長道は食はねば殊に弱りもぞする



般富門院大輔 伊勢山田御師での飯はさいなくと拔る程食て錢はかはらす  
 参議 雅經 三吉野の山に咲く花見に來れどくるかと見れば直にいぬ也  
 前大僧正慈圓 御蔭とて浮きたる旅と思ふかな我が寝た側に詰袖のひぬ  
 入道前太政大臣 嬪誘ふ隣の乳母もぬけ参りふり残されは我身なりけり  
 正三位家隆 長谷騒ぐ奈良のたるいの夕暮は味噌する音も忙しかりけり  
 前大僧正行尊 諸共に哀れと思へ物参り伊勢より外に参る人なし  
 權中納言定家 込む人を宿屋は裏の雜部家の焚くや風呂場の側に寝させり  
 後鳥羽院 人多し晝も冷飯味もなし腹思ふ故に物貰ふ身は  
 順徳院 股引や古き脚絆に草鞋がけ猶餘る程錢なかりけり





天智天皇 麥も田も刈りすてながら友集め我子供等も終に抜けつゝ  
 持統天皇 春過ぎて夏きに流行る抜参り子供の親は頭かく山  
 柿本人丸 ほのくゝと明くるを待たず夕から内隠れ行く錢ほしぞ思ふ  
 山邊赤人 餘所の裏に打出でて見れば御祓の彼處や此處の前裁せんざいに降る  
 猿丸太夫 奥様も所帯構はぬ抜仕度聲聞く時は主ぞ悲しき  
 安部仲麿 朝熊山峯あさまの名方萬金丹今一服と買うて行くかな  
 喜撰法師 吾いとを乳母がたらして急ぎゆく善く抜たぞと人は云なり  
 小野小町 西の色は變りにけりな日に焼けてわが身も人も詠ながめせし間に  
 蟬丸 是やこの知るも知らぬも旅人は行くも歸るも大方は伊勢  
 僧正遍照 参り見りやてん手に渡す握飯往來の人を暫し止めん  
 陽成院 つきたての餅も團子も賣り切らし人ぞ詰りて錢となりぬる  
 河原左大臣 道迄は忍ぶ亭主が嬖故に見られ初めては吾ならなくに  
 中納言行平 立別れ伊勢路の山は賑ひて参ると聞かば今走りけん

○いとハ  
大坂ニテハ  
娘の義

伊勢 戸棚から短き蒲團取出してあはぬ泊りを寝させてよとや  
 素性法師 今來ると云うた計りに待ちかねて有りだけ錢を持出づる哉  
 文屋康秀 來るからに跡は構はず夫婦連れ無理いふ坊は連ぬと云らん  
 菅家 此度は嬖も取あへずぬけ参りきはたつ蟬か人の見ぬ間に  
 三條右大臣 名にし負ふ阿波と和泉に遣る杓の人に知られて來る参り哉  
 源宗行 山里は夏ぞ物うし蚊が多い人目に草がいきり強けれ  
 壬生忠岑 有りだけに連立行きし抜参り夜を明がたに立つものは無し  
 曾我義忠 施行駕籠數多参るを道連れの行方も知らぬ人を乗せつゝ  
 源重之 胸を痛み氣を打つのみか子供連施行をあてに物や思ふと  
 伊勢大輔 かしま立奈良の都の見まほしく今日九重に急ぐ見物  
 良暹法師 喧やかましき宿を立出て眺むれば御蔭参りの人は布引  
 大納言經信 夕されば門田の稻も構はずに兄も弟も待合せ行く  
 崇徳院 瀬を早み大勢乗りし宮川の船も自由に急ぐ道中



皇太后宮大夫 世の中は道こそ多し御蔭にて山の奥まで隠れ無かりきしゆん恵法師 夜もすがら徒歩路を拾ふ拔参り聞のひまさへ晝と成りけり權中納言定家 この連をまつ程つらき物は無しやくや世話より身も急れ宛順 徳 院 股引や古き脚絆も入らばこそ尙ほ道連を誘ひ伊勢路へ

大新板色 里町中 おかげ参跡付文句

花の彌生にふる御札、おうた此子も抜け参り、抜けた今宮天下茶屋、茶屋もお客もしやくの種、おたね参りの身拵へ、拵へ出来たと飛んで出る、出入みなとに船多く、多くの人にやる施行、施行が多うて船山へ、山の彼方のお伊勢さん、おいせさんならお杉なり、お杉お玉もえら流行り、流行る参宮も御蔭年、年に一度の七夕さん、三々九度の燈明、あかしの名物鮭の足、おあし貰うた施行場の、野に出て里の町々を、おくれおしやれの御報謝か、ほしやがはなれて玉造り、つくり聾に伊勢音頭、音頭取りからのりがきて、来て見た此處は松原で、藁で尻ふく手鼻かむ、室の木崎でおしんど、しんど

○しんどハ辛勞也

が利になるこんにやくの、にやくの千鳥が鳴き叫び、わめくお前は調子もの、ちよしもの事がありたれば、あつたら口に風ひかし、東々と行くならば、奈良の宿屋にかり枕、眞闇がりでちよいつまみつまみ、つめつて痛さ知れ、知れぬくと迷子の子、此處までござれと仰せくと、あふせくとの大群集、群集々々を抜け参り、参る御宮は内宮外宮、ないくと苦も無うお愛度い、めで度かしくとお、醒めた、醒めた夢みし心地にて、にてもさんども参り度い、だいと神樂のいさぎよく、欲にも徳にも目が著かず、つかずほうにて腹へらし、へらし山坂足痛め、いための名物こぼれ梅、こぼれ梅から酒二升、せう事なしの呑つかけ、續けくと戻り道、道は四十五里浪の上、上を下へと道者々々、道者かうぢやの遠慮なう、なうと旅の御僧よ、そうと日蓮大菩薩、ほさつの名物乳母が餅、もち付くすひ付へばり付く、つくくとてんくと天満みこ、みこか戻るか坂の下、下からぬつと鎧武者、むしやからぬけた伊勢参り、参る下向の其中に、中に名所や古跡あり、こせき弟は長吉で、ちよきとあはつむりてんくと、てんてん持った杓と笠、かさまの薬萬金丹、旦那家來も打連れて、つれにならうと先立て、た



つた山ちうちやさん、三途の川の川端で、はたで布織る木綿織る、をりく、好かない御無心に、さつぱり困る大坂や、大坂山のさねかつら、かつらの草の口々に、口々みんない立田川、川は晴れてもはれやらぬ、やらぬがつほう外が濱、外が濱なる夫婦鳥、子鳥が鳴けば親鳥も、親鳥其處にか儂わしや此處に、此處に目川の田樂や、田樂一つあがらんか、あがらぬ重き石山も、山もだんく打過ぎて、すぎた男のつら憎くや、にくきやつなうかなうなぎ、うなぎかばやき鱈汁、しる人にせん高砂の、さこの彼方に詣でつ、つ、や伏見の下り船、船の乗合えいサツく、えいサく、の流行唄、うだく云うて淀つ、み、つ、み百まで踊るやら、をどりせうより小取せい、せいては事を仕損じる、しる餅あん餅食はぬか、くらはん神に祟りなし、なしとはことりのてうしぎり、ちやうしきれたか夜が明けた、明けた船場は八軒家、家ももうはや遠からず、鳥カアカア鳴き別れ、別れを惜しむ乗合衆、祝儀目出度ううち納め、納め参りも此邊で、へんてつもないよしにせう。チンテツくく、ッソ。

伊勢おんど

伊勢の御蔭の人多い、方々に内をぬけ参り、一はでな揃ひで連れが多い、連が多うても荷持ない、施行宿つまり押合てく、儂は長旅大坂よ、子供と共に抜けたぞへ、玉造、松原明日の泊りはせひ奈良泊り、奈良は昔の都の跡よ、名所見たいな、見たか案内かへ、なんでも委しう知れるへと、いうては三輪へ一と飛びに、行こかでつちが扱連れ誘さそひ、杓一本で心はさつさ行李飯、持った笠、葎で、施行の馬駕乗るとても、乗り人が多くてこまらしやつたの、輿にも乗つて行かしやつたの、追々出て来る伊勢参り、一見でこほりかきやした、外宮、内宮みや廻り、夫より朝熊あすくまへ参詣した、とかく浮世は面白や。

○見たか  
ハ見たく  
ばノ約リ

まんぢい

寝てられず、身拵へして閏月三日、所も厭ふにたまらぬ若手組、來年はまたれぬといはしやれ、だます御主人も親にも困らしやれた、もう出てから道中難澁する宿屋



宿屋、行先々々の宿屋とつたる所、かなし〜大勢野宿、無理に押しあうて、哀れ至極は雨用意なし、大雨降り〜雨道すべつたと、こけたる人もヤアとこせい、相談もふりすて、そらさぬ面して、はて近所、こそ〜たまらん人々、跡から抜けませうと杓をふりして、道々子持連やお年寄りや、長谷から戻られます、伊勢には禰宜さん儲け恐悦、和泉なり堺なり、遠方の御方々、阿波からはすみ出し、大坂をおだてる、笠屋に笠なし、荒物やに杓なし、道中もこつちも値上げすりや、叱られる御代ぞ有り難き。

誠に君の鹿島立、數多群集の其中で、やさしき姿の玉造、深く心もあかしたき、あそこや此處に松原や、とよろ〜と道はかどらぬ、戀の闇路のくらがり峠で見まほしき、袖引とむる野木の梅、跡を慕ひて追分や、結の神や佛様、戀しき祈りあまが辻、ならぬ事とは思へども、二度とは云はぬ市のもと、丹波市度君様の、柳の本をたくなれば、三輪どのやうになる辻も、長谷も厭はぬはい原も、何の立ちましょ君故と、三本松の色深く、したひ名張の浮々うかと、新田事もわすらはで、どふおふも尊もぞ、伊

勢路海道へ君の手が、とくやうになる身が唐にもあるか、わ木生れのたをやめに、肌ふれてなら命も捨てよ、六軒地獄へ落ちるとも、色よき返事松坂や、くした〜と目を配り、それ宮川にはち知れと、外宮笑に相の山、君様戀せん思はしさん、是ばかりはなも歸らうよ、うち橋知れぬ男ぢやと、思しめさうかどうぞして、君の口口を拜むなら、心の内の苦も内宮、二見の浦に居やうなら、朝日の登る心地とて、朝熊を紛ふ沖の方、浪とぞ君の御返事の、又の御かげを待入岩に七五三、御めで度くかしく。

おかげ參 妹脊山 三段目 拔文句

頃は彌生の始めつきた、お蔭參はじまる、口でははれぬ心のたけ、神前にて御師の人大神宮をながむ、追付よい殿御持つたら、夫婦連を羨む女中、女の念の通せよと祈願をこめて、女中の朝拜、常住あのやうに引付てゐたら嬉しかる、奈良の大佛様の後光佛、時代の習ひ、絹物の揃ひなし、あのやうに行儀にかしまつてばかり居て、大佛殿、見やる女中が申し〜、お泊りでござりませぬか、今度は云はいてもよかる、思ひのたゆる間はあるまい、性の悪い旦那の伊



勢參宮案じて居る女房、あの岩角のおりまがり、あぶないと氣をつける荷持、昔より御中不和の  
 關となり、坊主頭は戒しめ、ふり袖も裾もほらく、相の山お杉お玉、結ばれとけぬ我が思  
 ひ、よし悪しの判込めて一寸問ふはへ、しどけなんしよも厭ひなく、丁稚のぬけ参り、此の  
 山のあなたにと、あさまへのぼらぬ人、忍んで通ふ事叶はず、二見の女中にはれても、こ  
 こまでは來れ共、途中から戻る人、御面見ながらまゝならん、三十石の行違ひ、もの云ひか  
 はす事さへも、下向の人参詣の人群集、道理々々、我も心は飛び立てど、どう中の様子きいた以  
 上、今は中々思ひのたれ、一夜の契、隣國近邊といへども、夥しく参詣人、御道理でござ  
 ります、峠はわくしきへこんあけました、命さへ有るならば又逢ふ事もあるべきぞ、先の御か  
 げ、チ、めつさうな、宿屋のたこへ小便する人、心の願ひ叶ふしらせ、わが屋根へ降る御祓  
 さま、後室様のすぬなさばき、家内中代りく参詣さす隠居、あわておどるき止むる腰元、  
 宮川の渡しのり急ぎ、直に御願ひ遊ばしたら、よもやいやとは、御寮人すゝめてみる出入の内儀、  
 たとへ未來のとく様に御勤當受くるとも、伊勢参りしたいと云ふかた門徒の娘、障子ぐわらりと縁  
 ばなに、玉造の茶屋で出立のさわぎ、お前はどうせうとおぼしめす、世間の通り二文づつ水引繫  
 つぎ、四萬五千人に施す、守らせ給へと心中に、かしま立前の住吉参り、なうて車かけす、路銀  
 さへあれば杓買はいでも、手に取るやうにナウあそこく、三笠山の鹿さる、御こゑのかつた

身の幸ひ、出入の内儀、参宮の御供、物思ほしいおかほもち、人にゑうた道へたな女中、此や  
 うな嬉しい事はござりませぬ、風呂入めし貰ひ錢貰ひとめてまで貰ふた道者、エ、御側へ行きたい、  
 太夫つきする美しい女中錢なしの若手、こつちや向いて見たがよい、貢うて居る子に見せる相の山、  
 きこえぬつらさ、宿錢のねぎりこぎりに困る鬻、参る所も一處なれど、京街道長谷越、こち  
 らの思ふやうにもない、日本國に此上のない、伊勢兩宮、

諸國おかけ参り 阿古屋 琴責段 拔文句

されば治まる九重に、都よりの奉幣使、當時鎌倉の嚴命に従ひ、宿々の詰番衆、公事さいば  
 ん私の計ひなく、こづま取る手もまゝなれど、古市の遊女、形はほでに氣はしたれ、道より  
 戻る人、あすは拙者が受取る、宮川の替り段、いらぬ世話御無用々々々、拔参を譏るば、  
 それもなう無理とは思はず、拔参りした者の親方、此處を篤と合點せよ、息子以めて参らすと云  
 ふ親、萬人の譏りを受けても、後先無しの拔参り、其身の冥加悪かるまじ、諸方の施行、物や  
 はらかに理をせめて、あとより参らすと云ふ母、常々噂に聞いたれど、此前の御かけ、しかも  
 答ふる、堂島の施行、おまへ方も精出して、宿屋の下女、もてあましてぞ見えにける、道中



の施行宿、用意々々と呼ぶるにぞ、ぬけ参りの友、深くもきしるくるま木の、兩宮の手水鉢、様子如何と打守れば、ぬけ参り見合する人、いかなる事の縁により、御蔭に一度あうた人、野山をこえて清水へ、下向に京へ行く、互に顔を見知り合ひ、後先になり参る人、須磨や明石の浦船に、渡海場数艘、お前も無事にと、たつた一言、渡して行違ふ、さらばと云ふ間もな程に、宿屋の群集、ア、おはもじとさし俯むき、娘の施行受け、偽りない事見届けた、諸方へ降る御札、つきぬ御社をふし拜み、八十末社、件ふ情け数々の、大坂の施行、冥加に餘る御なさげ、施行駕に乗る足よわ、直なる道こそ有がたき、兩大神宮、長ぬは恐れ此まゝに、此戯作者、

○おはも  
じハ恥シ  
キ也

伊勢よりも治まる  
御代のお蔭かな 御かげ参宮人へ御膳獻立

お親方の許しな  
飯受けて参宮。

物焼 講札たよりにて宿取り損うてやく鯛。  
ゑらひつけやき。

平 六軒で一つになつて押くわゑ。  
お蔭でふきらふ伊勢ゑび。  
道者古市の芝居をきり見。  
津・松坂施行駕籠をしひたけ。  
あはと和泉は段々とくるこぶ。  
御蔭に二度逢うたしらが大根。  
止めても止まらぬきんかん。  
玉造からせり。  
笠皆をばきうり。  
連は誘うて皆來い。  
杓腰にさしみ仕立。

菓子菓 太夫付は座敷も蒲團もよいのをしんじよう。  
足の裏にも出来る青豆。  
さい銭は銘々にわりれぎ。  
ぜになし薄くす仕立。

物の香 鹿島立に足を痛めてきついな奈良漬。  
ぬに無しは長谷へ行大根。  
ぬけ参りは銭がなすび。

汁 道中は互に世話をやき鮎。  
宿屋何時なしに戸を敲きな。  
あるくのほちとみそ。

茶碗 道中油断のならぬごまどうふ。  
悪い事を生が味噌付て。  
罰が當る身から出たわさび。

菓子菓 へらいぐんしゆで女中年寄はとうき粽。  
若い衆は酒の力で次は飲めぬやうかん。  
下向を松風。  
うちは。

酒 銘酒二見一てうし出す。

鉢 宮川は鮎おされて、こけらすし。  
船へ乗りすし。  
近所の人に此處で青山椒。  
チヨイとむしんでほじかみ。

物し冷 おそいと宿はなし。  
とぶつと女中はすれるも。

硯 宿屋は群集でか、かまはんぼこ。  
夜通しに草履・草鞋をするめ。  
われ一に早々宿を取付やき。  
御本社の前はおしあひ。  
此頃は京からえらうくるま海老。  
ところば皆々嬉し。

平大 萬金丹屋はえらい人で店をしめじ。  
宇治橋の網は銭をとりみ。  
お杉お玉は美しい玉子わりおとし。

物吸 岩戸はきつちりつまり鱧じる。  
子をつれてなかさんせう。



うかれのつれ 本てうし

年を經てお蔭も今年珍らしや、斯かる折柄大坂も、施行に集つひひ行く中に、思はぬ人もせんぐりぬけて、今は野山の人群集、住める處を笠にも記し、來るは浮れの連の數、人にてつまる宿の内、廣い座敷につきながら、せまう寢さするまごとにかく、こんなお蔭が唐にもあろか、戸ざさぬ御世の春なれば、誰もこぞりて早拔けん。

諸國おかけ參り 忠臣藏 九段目拔文句

風雅でもなくしゃれでもなく、老人のぬけ參り。 此程の心使ひ、大勢人を使ふ親かた。 頓と繪に書いた通りきやうよい事ぢやないかいなう、 二軒茶屋より東を見物。 留めてもとまらぬ若氣の短慮、 雨具なし脚絆・笠なし錢なし。 たすきはづして飛んで出る、 小女郎下女つれ。 主人を大事に存するから、 しみたれがやまいもの。 おたづねに預りお恥かしい、 堺萬代八幡宮、 兵庫大山寺。 ほんに斯うとは露しらす、 満願寺壺坂開帳。 わたしが役の二人まへ、 乞食の拔參り。 冥加の程が恐しい、 飯行李に飯つめた施行。 イヤ／＼それはひが事ならん、 忌服なし。 そこいを明けて見せ申さん、 しち札と打かひ。 勿體ない事仰有ります、 ざら駕籠の施行。 どうも

顔があげられぬ、 相の山お杉、お玉。 しゃうもやうもないわいなう、 道中筋の宿屋。 おし戴き開き見ればこはいかに、 たばこ、はつたいとろ／＼こぶ施行。 思へば足も立兼ぬる、 芝居富の札屋。 我爲の六踏三略、 道中記の施し。 合點の行かぬこりやとちや、 所々にふる御拔 しやうをこゝにて見せ申さん、 しわんぼの施行。 そりや眞實かまことかと、 御祓様拜みに來る人。 移りかはるは世の習ひ、 笠屋杓屋の新店。 ざわ／＼と見苦しい。 男女百人組。 恥しいやら悲しいやら、 三文づつ貰ふ美しもの。 日本一のあはうのかゞみ、 ゑらゆすりのそるへ。 閨の契りも一夜ぎり、 報謝宿のちよいつまみ。 一別以來珍らしい、 古市の遊女ざれ。 詞もしどろ足取も、 しどろに見ゆる、 笠うり・杓うり。 ふる時は少しの風にもちり軽い身でござりませうとも、 あの如く致して丸まつた時は、 宇治橋のなげ錢澤山。 御計略の念願とゞき、 深江の笠屋朝熊の萬金丹。 昔より今に至るまで、 天照皇大神宮御奇瑞。 さぞ本望で御座らうなう、 御師・末社・禰宜。

天照す神の惠の御影とて黒うなる程つまる群集

諸國おかけ參り 太功記 十段目拔文句

御恩は海山かへがたし、 杓屋・笠屋、 御遠慮なしに御先へまゐる、 施行風呂。 心残りのないや 御蔭耳目第二 おかけ參り太功記十段目拔文句



うと、一々呼んで遣る施行。道の武智も仰天し、聞きしよりは参詣群集。なう口へわしや、満願寺・壺坂開帳。確たしかにそれと承らず、道中筋取沙汰。しるしは目前是を見よ、所々にふる御祓。百萬石に勝るぞや、施行宿。とういそがなくものぞいなア、道中群集。千なり瓢箪馬印、堺より九ほりの施行。仔細はいかに様子はいかに、道中の様子尋ぬる人。通れ高名手柄して、當世流行そるへ。とかくするうち時刻がのびる、施行寄合。思ひ置く事更になし、路銀を持ち揃へば、著たり施行はもらひ。残念至極とばかりにて、長谷より戻つた人。心に懸り候故、手に付かぬ職人。今一度お顔が見たけれど、まへおかげにあうた老人。先立つ不孝は許してたべ、子供拔参り。互に手に手を取り交はし、二十人組・三十人組。ヤア珍らしい、八歳の子供白馬に乗つて参宮。めでたいく嫁御寮、伊勢御師・禰宜。若し覺られたら、施行場へくる非人。威風凛々凜然たり、伊勢太神宮、女童の知る事ならず、大神宮御奇瑞。

なのはかへうた

おかげとは阿波始めけん、外の在所もうはのそら、伊勢様参ると、示す心のあどけなさ、どれく様の出立も、別に變らぬ杓一つ、をどり参りは勿體なうて、子供ぬけ

たも多し事、難波にとめた施行宿。

くろかみかへうた

この頃の、皆こぞりたるお蔭には、抜けて出た日の思ひより、そとで寝る夜は笠枕、それにはだしでつらひぢやというて、内の親御の心も知らず、ちやんと抜けたる笠に杖、ゆうべの杓を今朝さげて、何處どこも群集で宿屋なや、泊るとすれど困る大勢。

浪華無量齋門人 小西駒藏源義明戲著

### 伊勢参りの道五十里六十日之間凡錢高之附

但一町ハ六十間、一里ハ五十町、道幅一間、一坪ニ付人数廿四人並ぶ、

相庭金六十日、錢九匁、

行戻百里人数總高、一日ニ七百二十萬人、

六十日ニ四億三千二百萬人、

外宮・内宮へ賽錢 千八十萬貫文、銀ニテ九萬七千二百貫目、

十二銅宛上り積り 金 百六十二萬兩、

百六十末社賽錢、二億千六百

御蔭耳目第二

くろかみかへうた 伊勢参りの道五十里 六十日之間凡錢高之附



萬貫文、銀百九十四萬四千貫目、十枚ニ付十二づつ、五百四十萬貫文、同四萬八千六百貫目、旅  
代百五十文宛として、六千四百八十萬貫文、同五十八萬二千二百貫目、笠一枚ニ付百八七千九百二萬貫  
宛として文、同千七百八十八萬貫目、杓一本ニ付七百二十萬貫目、同六萬四千八百貫目、ござ一枚八十  
文、同千七百八十八萬貫目、十六文がへ、七百二十萬貫目、同百〇八萬兩、文がへにて、  
三千六百萬目、同三十二萬四千貫目、飯籠一ツ七、三千百五十萬貫文、同二十八萬三千五百貫目、  
手拭一筋百廿五文がへ、五千四百四十五萬貫文、同四十九萬五千貫目、負籠一個三、一億五千六百六十  
萬貫文、同百四十萬九千四百貫文、草鞋掛、三百文宛、一億九百六十萬貫文、同百十六萬六千  
九百四十兩合羽一枚、一億五千六百六十萬貫文、同百三十六萬八百貫目、草鞋十足、五千八  
四萬兩、三百六十文、同二千三百四十九萬兩、脚絆、同二千二百六十八萬兩、百三十四文、五千八  
百五十萬貫文、同五十二萬六千五百貫目、萬金丹一粒宛、百三十五萬貫文、同一萬二千五百貫目、  
姥餅十五文宛、同八百七十四萬五千兩、三文宛、同九十七萬二千兩、矢橋の渡、其外諸四千二百二十萬貫  
宛、同三十八萬八千八百貫目、目川の田樂二十四、千〇八十萬貫文、同九萬七千二百貫目、宇治橋  
文、同六百四十八萬兩、文づつ食ふ時は、同六百六十二萬兩、にて一  
文宛、四十三萬二千文、同三千八百八十八貫目、お杉お玉に二文、おつやる積り、八十六萬四千貫文、同七千七  
貫目、同十二萬、一日ニ米酒其外總て、一億二千九百六十萬石、一石に付、代金一兩二分、  
九千六百兩、升數の物三升宛にて、一億二千九百六十萬石、總金一億九千四百四十萬兩、  
惣錢高 十〇億六千六百三十七萬六千貫文、

此銀高九百五十七萬九千七百九十三百八十四貫文、  
米代とも金高三億五千四百〇五萬六千四百兩、

右の記する所は、纔に五十里の道程にして、六十日の間さへ此の如し。いやんや  
數年參詣する日本國の人をや。實に以て算へかたき大數なり。且又これに洩れ  
たるは後編に出す。

○柳々の手でひいて御覽

おかげくと世に面白う、ぬけて參るがお伊勢の奇特、連に従ひ揃の衣裳、その身  
其身の伊達くらべ、京も大坂もわけもなし、始めは阿波におだてられ、日増になつ  
て、つひこちやになる。施行の駕籠のかきおもり、ど抜けた拍子の掛聲は、朝飯の  
腹すいた人。

伊勢參宮誠の道しるべ

御蔭耳目第二 柳々の手でひいて御覽 伊勢參宮誠の道しるべ



抑、伊勢兩宮へ參詣せんと思ふ徒は、右の御神託の意を能く／＼察すべし。譬へて云はゞ、世間拔參りと號して、主親の許もなきに、内を忍び出で、參宮せんとす。是則謀計なり。幸に怪我過なく參りぬる共、眼前の利潤にして主の用を闕き、父母に苦をかけて參るは非道にして、正路ならざれば、神明争で受け給ふべき。質朴なる徒は、我も參宮したけれども、大切なる主人・大事なる親の許も無きに、拔參りなどするは、不忠不孝なりと思ひ止る。是則正直なり。此の如くなれば、一旦は本意なきに似たれども、其正直を神明憐み給ひ、終には、主親の許を得て、明に參宮すべき様に守るべしとの有り難き御神託なり。然るに辨へなき徒は、參宮さへすればよき事と思ひて、主に手をつがせ、親に苦しみを掛けるとも心付かず、只賑はしきに心移り、何の差別なき拔り參する共、何ぞ神明の意に叶ふべき。特に當年などは、國々よりも、御蔭參りと號し、數多參宮すれば、驛々の宿屋群集して、宿を取難きにぞ、是非なく野に伏し山に寝ぬ、果ては難澁に堪へ兼ね、中途よりすご／＼と歸る人々もあるべし。又當所には、種々の施行あるを見て、斯くては路銀なくても參

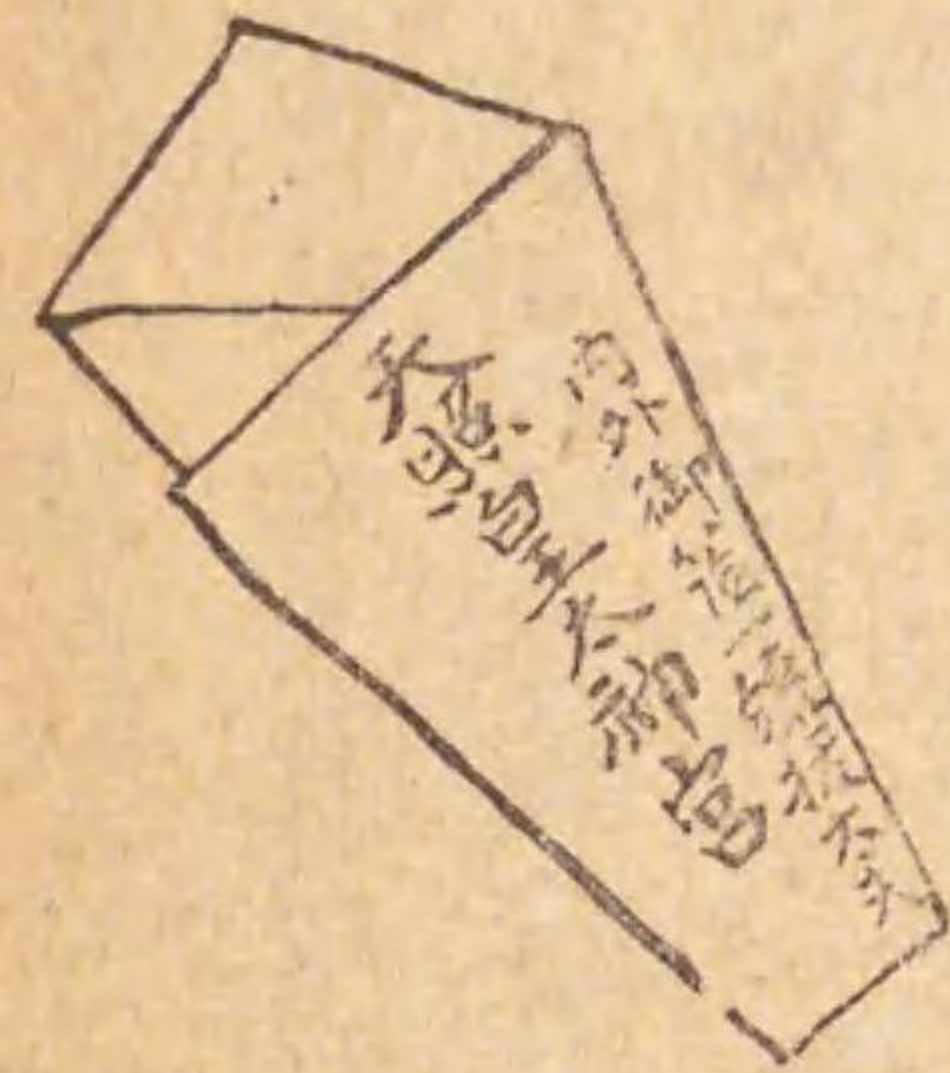
宮せらるゝ事と心得、若き女子・童僕辨へなき心得より、路銀雨具をも用意せずして、内を拔出づるも有るべけれども、是大いなる心得違なり。施行の有るは各、限り有つて、道中悉く有るにあらず。譬へ有りととも、路用の十分一にも足るべからず。争で億萬の人に行届くべき。されば道中にて飢餓、或は雨露に濡れしほれ、難澁此上なかるべし。只參宮し度く思ふ輩は、主親に願ひ、諸事差支なくて、許を受けなば、道中の勝手を覚えし人を連れ參るべし。主親の許しなくば、慎みて思ひ止まり、時節を待つて願ふべし。努々つめつめ悪しき徒にそゝのかされ、主親の恩を忘るべからず。是ぞ參宮の正路なるべし。 施印

諸國おかげ參り白石噺 吉原段拔文句

宮や宮柴打連れて、太夫様御機嫌よく、太鼓打踊參り、大事にせいと下さんした、路用金。お前も早う身じまひして、古市遊女拔參に誘はれた連、なじよにもかしよにもおらだけひとり、此節留守人。差合な顔はないかへ、何の奉公どころかへ、叱られて同役丁稚、いやな事ではない



かいな。宿々の風拔参りの友、心一ちにし申て、薩州廿七萬餘、お前も御出と連立つて、拔  
 参の友、道中すがらの艱難も、娘連れに雨ふり、そなたはそこらかたづきやれ、鹿島立のあと、  
 續くは末の松山を、お蔭に参る人々、田舎娘のあたりきよるく、京・大坂見物、其苦を助け  
 うばつかりに、所々の施行、お前の古郷國處、道中の迷子、其様に思やるももつとも、娘に  
 せがまるゝ母親、すれかけ申すも他生の縁、道中の施行宿、思ひ返せば十二のとし、此前の  
 おかげばなしの老女、心づくしのはてはおるか、追々出て来る参宮、手を取かはす兄弟が、  
 はぐれぬ様にと、私もおつ付其處へ行く、笠のひも付てぬる人、姉妹ひそくと、出立の拵へ、  
 奥の御客はお待ち兼ね、宿屋の飯時、向と違つた物か、堂島の施行宿、昨日の返事聞いてい  
 ぢや、参宮さす親、これ此處をよう聞きや、先で参らすと云ふ母、身の一徳、おかげに  
 二度逢つた人、エ、有難うござんすと、施行受ける人、お客選びのしやうもいらす、道中の  
 宿屋、たゞふし拜むばかりなり、兩大神宮、



日本陸軍大臣  
 元祖天照大神

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、一百一、一百二、一百三、一百四、一百五、一百六、一百七、一百八、一百九、二百、二百一、二百二、二百三、二百四、二百五、二百六、二百七、二百八、二百九、三百、三百一、三百二、三百三、三百四、三百五、三百六、三百七、三百八、三百九、四百、四百一、四百二、四百三、四百四、四百五、四百六、四百七、四百八、四百九、五百、五百一、五百二、五百三、五百四、五百五、五百六、五百七、五百八、五百九、六百、六百一、六百二、六百三、六百四、六百五、六百六、六百七、六百八、六百九、七百、七百一、七百二、七百三、七百四、七百五、七百六、七百七、七百八、七百九、八百、八百一、八百二、八百三、八百四、八百五、八百六、八百七、八百八、八百九、九百、九百一、九百二、九百三、九百四、九百五、九百六、九百七、九百八、九百九、一千、一千一、一千二、一千三、一千四、一千五、一千六、一千七、一千八、一千九、二千、二千一、二千二、二千三、二千四、二千五、二千六、二千七、二千八、二千九、三千、三千一、三千二、三千三、三千四、三千五、三千六、三千七、三千八、三千九、四千、四千一、四千二、四千三、四千四、四千五、四千六、四千七、四千八、四千九、五千、五千一、五千二、五千三、五千四、五千五、五千六、五千七、五千八、五千九、六千、六千一、六千二、六千三、六千四、六千五、六千六、六千七、六千八、六千九、七千、七千一、七千二、七千三、七千四、七千五、七千六、七千七、七千八、七千九、八千、八千一、八千二、八千三、八千四、八千五、八千六、八千七、八千八、八千九、九千、九千一、九千二、九千三、九千四、九千五、九千六、九千七、九千八、九千九、一万、一万一、一万二、一万三、一万四、一万五、一万六、一万七、一万八、一万九、二万、二万一、二万二、二万三、二万四、二万五、二万六、二万七、二万八、二万九、三万、三万一、三万二、三万三、三万四、三万五、三万六、三万七、三万八、三万九、四万、四万一、四万二、四万三、四万四、四万五、四万六、四万七、四万八、四万九、五万、五万一、五万二、五万三、五万四、五万五、五万六、五万七、五万八、五万九、六万、六万一、六万二、六万三、六万四、六万五、六万六、六万七、六万八、六万九、七万、七万一、七万二、七万三、七万四、七万五、七万六、七万七、七万八、七万九、八万、八万一、八万二、八万三、八万四、八万五、八万六、八万七、八万八、八万九、九万、九万一、九万二、九万三、九万四、九万五、九万六、九万七、九万八、九万九、十萬、十万一、十万二、十万三、十万四、十万五、十万六、十万七、十万八、十万九、十一萬、十一万一、十一万二、十一万三、十一万四、十一万五、十一万六、十一万七、十一万八、十一万九、十二萬、十二万一、十二万二、十二万三、十二万四、十二万五、十二万六、十二万七、十二万八、十二万九、十三萬、十三万一、十三万二、十三万三、十三万四、十三万五、十三万六、十三万七、十三万八、十三万九、十四萬、十四万一、十四万二、十四万三、十四万四、十四万五、十四万六、十四万七、十四万八、十四万九、十五萬、十五万一、十五万二、十五万三、十五万四、十五万五、十五万六、十五万七、十五万八、十五万九、十六萬、十六万一、十六万二、十六万三、十六万四、十六万五、十六万六、十六万七、十六万八、十六万九、十七萬、十七万一、十七万二、十七万三、十七万四、十七万五、十七万六、十七万七、十七万八、十七万九、十八萬、十八万一、十八万二、十八万三、十八万四、十八万五、十八万六、十八万七、十八万八、十八万九、十九萬、十九万一、十九万二、十九万三、十九万四、十九万五、十九万六、十九万七、十九万八、十九万九、二十萬、二十万一、二十万二、二十万三、二十万四、二十万五、二十万六、二十万七、二十万八、二十万九、二十一万、二十万一、二十一万二、二十一万三、二十一万四、二十一万五、二十一万六、二十一万七、二十一万八、二十一万九、二十二萬、二十二万一、二十二万二、二十二万三、二十二万四、二十二万五、二十二万六、二十二万七、二十二万八、二十二万九、二十三萬、二十三万一、二十三万二、二十三万三、二十三万四、二十三万五、二十三万六、二十三万七、二十三万八、二十三万九、二十四萬、二十四万一、二十四万二、二十四万三、二十四万四、二十四万五、二十四万六、二十四万七、二十四万八、二十四万九、二十五萬、二十五万一、二十五万二、二十五万三、二十五万四、二十五万五、二十五万六、二十五万七、二十五万八、二十五万九、二十六萬、二十六万一、二十六万二、二十六万三、二十六万四、二十六万五、二十六万六、二十六万七、二十六万八、二十六万九、二十七萬、二十七万一、二十七万二、二十七万三、二十七万四、二十七万五、二十七万六、二十七万七、二十七万八、二十七万九、二十八萬、二十八万一、二十八万二、二十八万三、二十八万四、二十八万五、二十八万六、二十八万七、二十八万八、二十八万九、二十九萬、二十九万一、二十九万二、二十九万三、二十九万四、二十九万五、二十九万六、二十九万七、二十九万八、二十九万九、三十萬、三十万一、三十万二、三十万三、三十万四、三十万五、三十万六、三十万七、三十万八、三十万九、三十一萬、三十一万一、三十一万二、三十一万三、三十一万四、三十一万五、三十一万六、三十一万七、三十一万八、三十一万九、三十二萬、三十二万一、三十二万二、三十二万三、三十二万四、三十二万五、三十二万六、三十二万七、三十二万八、三十二万九、三十三萬、三十三万一、三十三万二、三十三万三、三十三万四、三十三万五、三十三万六、三十三万七、三十三万八、三十三万九、三十四萬、三十四万一、三十四万二、三十四万三、三十四万四、三十四万五、三十四万六、三十四万七、三十四万八、三十四万九、三十五萬、三十五万一、三十五万二、三十五万三、三十五万四、三十五万五、三十五万六、三十五万七、三十五万八、三十五万九、三十六萬、三十六万一、三十六万二、三十六万三、三十六万四、三十六万五、三十六万六、三十六万七、三十六万八、三十六万九、三十七萬、三十七万一、三十七万二、三十七万三、三十七万四、三十七万五、三十七万六、三十七万七、三十七万八、三十七万九、三十八萬、三十八万一、三十八万二、三十八万三、三十八万四、三十八万五、三十八万六、三十八万七、三十八万八、三十八万九、三十九萬、三十九万一、三十九万二、三十九万三、三十九万四、三十九万五、三十九万六、三十九万七、三十九万八、三十九万九、四十萬、四十万一、四十万二、四十万三、四十万四、四十万五、四十万六、四十万七、四十万八、四十万九、四十一萬、四十一万一、四十一万二、四十一万三、四十一万四、四十一万五、四十一万六、四十一万七、四十一万八、四十一万九、四十二萬、四十二万一、四十二万二、四十二万三、四十二万四、四十二万五、四十二万六、四十二万七、四十二万八、四十二万九、四十三萬、四十三万一、四十三万二、四十三万三、四十三万四、四十三万五、四十三万六、四十三万七、四十三万八、四十三万九、四十四萬、四十四万一、四十四万二、四十四万三、四十四万四、四十四万五、四十四万六、四十四万七、四十四万八、四十四万九、四十五萬、四十五万一、四十五万二、四十五万三、四十五万四、四十五万五、四十五万六、四十五万七、四十五万八、四十五万九、四十六萬、四十六万一、四十六万二、四十六万三、四十六万四、四十六万五、四十六万六、四十六万七、四十六万八、四十六万九、四十七萬、四十七万一、四十七万二、四十七万三、四十七万四、四十七万五、四十七万六、四十七万七、四十七万八、四十七万九、四十八萬、四十八万一、四十八万二、四十八万三、四十八万四、四十八万五、四十八万六、四十八万七、四十八万八、四十八万九、四十九萬、四十九万一、四十九万二、四十九万三、四十九万四、四十九万五、四十九万六、四十九万七、四十九万八、四十九万九、五十萬、五十万一、五十万二、五十万三、五十万四、五十万五、五十万六、五十万七、五十万八、五十万九、五十一萬、五十一万一、五十一万二、五十一万三、五十一万四、五十一万五、五十一万六、五十一万七、五十一万八、五十一万九、五十二萬、五十二万一、五十二万二、五十二万三、五十二万四、五十二万五、五十二万六、五十二万七、五十二万八、五十二万九、五十三萬、五十三万一、五十三万二、五十三万三、五十三万四、五十三万五、五十三万六、五十三万七、五十三万八、五十三万九、五十四萬、五十四万一、五十四万二、五十四万三、五十四万四、五十四万五、五十四万六、五十四万七、五十四万八、五十四万九、五十五萬、五十五万一、五十五万二、五十五万三、五十五万四、五十五万五、五十五万六、五十五万七、五十五万八、五十五万九、五十六萬、五十六万一、五十六万二、五十六万三、五十六万四、五十六万五、五十六万六、五十六万七、五十六万八、五十六万九、五十七萬、五十七万一、五十七万二、五十七万三、五十七万四、五十七万五、五十七万六、五十七万七、五十七万八、五十七万九、五十八萬、五十八万一、五十八万二、五十八万三、五十八万四、五十八万五、五十八万六、五十八万七、五十八万八、五十八万九、五十九萬、五十九万一、五十九万二、五十九万三、五十九万四、五十九万五、五十九万六、五十九万七、五十九万八、五十九万九、六十萬、六十万一、六十万二、六十万三、六十万四、六十万五、六十万六、六十万七、六十万八、六十万九、六十一萬、六十一万一、六十一万二、六十一万三、六十一万四、六十一万五、六十一万六、六十一万七、六十一万八、六十一万九、六十二萬、六十二万一、六十二万二、六十二万三、六十二万四、六十二万五、六十二万六、六十二万七、六十二万八、六十二万九、六十三萬、六十三万一、六十三万二、六十三万三、六十三万四、六十三万五、六十三万六、六十三万七、六十三万八、六十三万九、六十四萬、六十四万一、六十四万二、六十四万三、六十四万四、六十四万五、六十四万六、六十四万七、六十四万八、六十四万九、六十五萬、六十五万一、六十五万二、六十五万三、六十五万四、六十五万五、六十五万六、六十五万七、六十五万八、六十五万九、六十六萬、六十六万一、六十六万二、六十六万三、六十六万四、六十六万五、六十六万六、六十六万七、六十六万八、六十六万九、六十七萬、六十七万一、六十七万二、六十七万三、六十七万四、六十七万五、六十七万六、六十七万七、六十七万八、六十七万九、六十八萬、六十八万一、六十八万二、六十八万三、六十八万四、六十八万五、六十八万六、六十八万七、六十八万八、六十八万九、六十九萬、六十九万一、六十九万二、六十九万三、六十九万四、六十九万五、六十九万六、六十九万七、六十九万八、六十九万九、七十萬、七十万一、七十万二、七十万三、七十万四、七十万五、七十万六、七十万七、七十万八、七十万九、七十一萬、七十一万一、七十一万二、七十一万三、七十一万四、七十一万五、七十一万六、七十一万七、七十一万八、七十一万九、七十二萬、七十二万一、七十二万二、七十二万三、七十二万四、七十二万五、七十二万六、七十二万七、七十二万八、七十二万九、七十三萬、七十三万一、七十三万二、七十三万三、七十三万四、七十三万五、七十三万六、七十三万七、七十三万八、七十三万九、七十四萬、七十四万一、七十四万二、七十四万三、七十四万四、七十四万五、七十四万六、七十四万七、七十四万八、七十四万九、七十五萬、七十五万一、七十五万二、七十五万三、七十五万四、七十五万五、七十五万六、七十五万七、七十五万八、七十五万九、七十六萬、七十六万一、七十六万二、七十六万三、七十六万四、七十六万五、七十六万六、七十六万七、七十六万八、七十六万九、七十七萬、七十七万一、七十七万二、七十七万三、七十七万四、七十七万五、七十七万六、七十七万七、七十七万八、七十七万九、七十八萬、七十八万一、七十八万二、七十八万三、七十八万四、七十八万五、七十八万六、七十八万七、七十八万八、七十八万九、七十九萬、七十九万一、七十九万二、七十九万三、七十九万四、七十九万五、七十九万六、七十九万七、七十九万八、七十九万九、八十萬、八十万一、八十万二、八十万三、八十万四、八十万五、八十万六、八十万七、八十万八、八十万九、八十一萬、八十一万一、八十一万二、八十一万三、八十一万四、八十一万五、八十一万六、八十一万七、八十一万八、八十一万九、八十二萬、八十二万一、八十二万二、八十二万三、八十二万四、八十二万五、八十二万六、八十二万七、八十二万八、八十二万九、八十三萬、八十三万一、八十三万二、八十三万三、八十三万四、八十三万五、八十三万六、八十三万七、八十三万八、八十三万九、八十四萬、八十四万一、八十四万二、八十四万三、八十四万四、八十四万五、八十四万六、八十四万七、八十四万八、八十四万九、八十五萬、八十五万一、八十五万二、八十五万三、八十五万四、八十五万五、八十五万六、八十五万七、八十五万八、八十五万九、八十六萬、八十六万一、八十六万二、八十六万三、八十六万四、八十六万五、八十六万六、八十六万七、八十六万八、八十六万九、八十七萬、八十七万一、八十七万二、八十七万三、八十七万四、八十七万五、八十七万六、八十七万七、八十七万八、八十七万九、八十八萬、八十八万一、八十八万二、八十八万三、八十八万四、八十八万五、八十八万六、八十八万七、八十八万八、八十八万九、八十九萬、八十九万一、八十九万二、八十九万三、八十九万四、八十九万五、八十九万六、八十九万七、八十九万八、八十九万九、九十萬、九十万一、九十万二、九十万三、九十万四、九十万五、九十万六、九十万七、九十万八、九十万九、九十一萬、九十一万一、九十一万二、九十一万三、九十一万四、九十一万五、九十一万六、九十一万七、九十一万八、九十一万九、九十二萬、九十二万一、九十二万二、九十二万三、九十二万四、九十二万五、九十二万六、九十二万七、九十二万八、九十二万九、九十三萬、九十三万一、九十三万二、九十三万三、九十三万四、九十三万五、九十三万六、九十三万七、九十三万八、九十三万九、九十四萬、九十四万一、九十四万二、九十四万三、九十四万四、九十四万五、九十四万六、九十四万七、九十四万八、九十四万九、九十五萬、九十五万一、九十五万二、九十五万三、九十五万四、九十五万五、九十五万六、九十五万七、九十五万八、九十五万九、九十六萬、九十六万一、九十六万二、九十六万三、九十六万四、九十六万五、九十六万六、九十六万七、九十六万八、九十六万九、九十七萬、九十七万一、九十七万二、九十七万三、九十七万四、九十七万五、九十七万六、九十七万七、九十七万八、九十七万九、九十八萬、九十八万一、九十八万二、九十八万三、九十八万四、九十八万五、九十八万六、九十八万七、九十八万八、九十八万九、九十九萬、九十九万一、九十九万二、九十九万三、九十九万四、九十九万五、九十九万六、九十九万七、九十九万八、九十九万九、一百萬、

ほうなう

一、抑、此天照大神圓の儀は、予が先祖伊弉諾伊弉册尊、始め御出現ありて、此神薬  
 を製薬成され候處、誠に其功験の著しき事、世人の能く知る所なり。第一下萬民を  
 能く撫育し、氣意を整へ、五穀成就する事を専らと成され候。かるが故に、民賑ひ  
 人氣能く治まる事妙なり。尤も例年秋の頃より冬分は、陰氣發し氣鬱する人多し。  
 然りと雖、春陽の春を迎へ、彌生花の頃に至りて、右神薬の功験速なるを以て知る  
 べし。○婦人は安全参宮を一度用ひ置けば、他へ嫁するとも大に鼻高く、故に天狗  
 の面色、又は高麗やの恐れなし。○小兒は一と度お蔭拔参を用ひ置けば、成長の後  
 間拔の憂ひなし。猶此度参詣の人々は、路銀入らず施し多し。餘は奉納持行きて知  
 るべし。○尤も此薬六十年以前披露致し候處、近來甚だ人氣悪しく相成候故、又候  
 此度相改め、御祓を以て披露致候處、忽ち日本國中へ相弘まり、人氣も治し豊年を祝  
 し、日々参詣の群集神前に市を爲す事、偏に神薬の速なる事恐るべし。貴ぶべし。

眞方儉約丸法書

禁

ほうなふ  
 (奉納)ハ  
 かうのう  
 (効能)ホ  
 キカセタ  
 リ



- 一、簡略五兩、餘情の皮を去り工夫の水に浸す。好色、遊山、物好、
- 一、始末四兩、欲心を去り心の水に浸す。油斷、作事、餘情、
- 一、世帯四兩、世間の上皮を去り、眞實の水に浸す。美食、氣隨、自由、
- 一、堪忍二兩、其儘用ふ、鐵器を忌む。朝寢、夜深、大酒、
- 一、算用一兩、算盤にあて、誠に細かに刻む。

右に記す儉約丸の法書は、此度太神圓弘めの爲め、參詣の人々へ施し申候。此五藥を心の藥研にて能く細末し、分別の糊を以て丸くし、一時に一粒づつ用ふべし。其上眞實の心を以て、渡世出精するに於ては、神明のお蔭にて、一生貧病の憂なく、子孫長久疑ひなし。

本家參詣所、勢州山田、兩宮齋拜製、  
大坂元弘所、内平野町松屋丁東へ入、日中軒神明、  
私宮、乍憚口上

一、御蔭を以て、日増に御參詣被成下候段、難有仕合に奉存候。是に因て此度御

折節平野町神明に遷宮有りて造り物多し是れを云へる也

禮冥加の爲め、當閏三月十六日か四月八日迄、日數三七日の間、宮移し御祝儀として、造り物品々澤山に御覽に入れ奉り候間、賑々しく御參詣の程奉希上候。已上。  
右の外諸國御城下津々浦々に神明社御座候間、名所篤と御聞合の上、毎月六齋御參詣なさるべく候。

伊勢おかげ道成寺新板色里町中大流行  
金がみさきかへ文句 大坂稻荷前角  
あは平坂

おかげ噂は數々ござる、しよてのおかげを聞く時は、施行無上と咄すなり。今度のお蔭と聞く時は、施行めつさうとはしるなり。しんしゃうのひらきにはどれもならぬと人々で、しやくや飯籠入らぬかと、聞いて戴く人ばかり、我も子供を引連れて、しんどいで、茶屋で休み明さん、言はず語らず、我子供皆引連れて、ぬけるのは連もなく、只浮々ともうでも施行が當てちや物、坂へかゝればおとまじと、云うて袂からくす袋、内股へたゝふり掛ける。どうしても女子は太り肉色と愛嬌で施行が多い、今度態々夫婦連にて腰辨當で、早う抜けるがよし。花の三月馬も矢鱈に



引く馬士連が、勤めおんどか、誰も一度にやあとこせ。ほんの抜参りしごく、まめなど何も苦にせぬからだ。其儘かみもしやまんばむりを抜参り、それがほんのお蔭一二三四餘程行きます人もせります。共に此身を難儀重ねて、笠はまるきり唯抜き捨て、参る群集はえらいものぢやへ。

~~~~~  
お蔭参りいたこぶし

「お蔭参りと皆なまめきて」思いの旅出立、拵へ立派に道連れの「しやれた御方を乗せなさる」さつても見事な施行駕籠、揃の裃纏華やかに、折々しがないお方でも、こつそり内をば抜けやうと、御受があるなら参らんせ。

「今日は日和も良い鹿島立ち」三條通や粟田口、はつと出たる日の岡を「越せば山科奴茶屋」追分名物大津繪が、名代の算盤一里塚、折々連に跡や先き、逢坂關を越えやうと、大津で八丁杉の辻。

「瀬田へ廻れば三里の道を」かちで行く人、石場から、出船は今ぢやと、我れいちに、

「乗るや矢橋の渡船」名高き近江の八景や、見晴らす湖水の風景も、折々比叡の吹下し、これには困り入りやした。追風で草津へ一とはしり。

「姥が餅とて皆懐の」小錢出だして買うて食ふ、目川の田樂よい風味「何でもかをるや梅の木で」鶯ならねど云寄りて、床几で一服和中散、石部や水口おしやれ衆が、すつしりお客を止めやした。大野は焼鳥名物で。

「蓑と笠著て土山越えた」雲に鈴鹿や坂の下、てるくまふととつばかは「足も心に關地藏」をがみて通ればくづはらか、むく本越えたら錢掛の、松原くよくのなかなかと、さても退屈させやした。おなかもくぼくて辨當か。

「こゝは津の町皆阿彌陀笠」誰も著ながら伏拜み、急げばくもつが松坂を「越えて明星で名物の」かつばは名高き煙草入、おばたを離れて宮川で、清めの手水や川こほり、程無く山田へ著きやした。これからだんく宮巡り。

「誰も遙々野山を越えて」参る心は有難や、柏手打つて伏し拜む「こゝぞ眞の天てらす」本社の前には鈴しめの、神への御ちそうお神樂と、折々結構な参詣は、しつかり



だいにぐ打やした。神より太夫の御悦び。

「巡る末社の数々数多」外宮に四十末社あり、内宮に八十末社あり「中に尊き天の宮」此方の社は風の宮、弓矢の神にて八幡宮、惠比須に大黒・稻荷さん、福德與へたび給へ。あきない繁昌祈ります。

「天の岩戸は古へ神の「隠れ給ひし御跡と、音にも聞えて名も高天」はらひ給へと行先に「あちらも賽銭あげなされ、こちらもたつ程勸められ、折々ところで十二銅、どつさり／＼包んでなげやした。につこり笑面の宮雀。

「相の山とて皆立止まる」お杉お玉が三味線の、音色も可笑しき一とふしや「さてもひくにぞ喧しい」しまさん、こんさんなげさんせ、ゆかたの女中もやてがんせ、でんちうはりひぢさゝらする、小さい子供の一とをどり。おやまを作りて錢せがむ。

「錢をばら／＼下からうける」「こゝは宇治橋早越えて、いはほにしめなは引はえし、」二見の浦とて名に高き「朝熊に来て見りや名物の、萬金丹とて効能は、をり／＼酒のゑひざまし、さつぱり頭痛も止みやした。つひでに磯部の鸚鵡石。

「残る方なく巡りて戻る」宿は此處へと太夫つき、色々馳走の取持に「立つて下向の土産物」劔先・お祓・青海苔に、ぬりはし・火繩にそめ貝や、おひ／＼宿から樽肴、めでたい下向をさか向ひ。さゝんざ歌ふも神の徳。

おかげ踊 作者知らず、

文政寅の春よりも、御蔭参りと云ひはやし、伊勢の宮居を志し、限りしられぬ諸人も、今はとだえて冬枯れと、なれる頃ぞと思ひしに、大和・河内はおかげにて、田畠豊に實りしと、神無月より躍り出し、霜月・師走のぼりつめ、羅紗・天鷲絨の幟立て、金の御幣に揃ひの衣裳、三味線・太鼓・笛・鼓、二百三百一と群れに、御蔭躍りと名を付けて、其振付は難波より、敷への金に迎へつゝ、吾劣らじと村々の、おごれる衣裳華やかに、躍りながらの伊勢参り、御禮参りと云ひはやし、男女の差別なく、老も若きも一様に、年の貢も其儘に、浮かれ歩行を村長の、始めの程は鎮めんと、氣を揉み上げてあせりしも、何時の程より共々に、躍れる中に打交り、手振袖振り折々は、難波



津迄も浮かれ来る、怪しき業と思へども、これも天照神の徳、外に類ひはあらじとぞ思ふ。

大和・河内は分けて田畠の實のりしと、金の御幣や幟立て、老若男女の差別なく、御蔭とてをどるとき。

御蔭躍りと皆一様に衣裳著て、三味線・太鼓で囃し立て、うつゝでねり行く伊勢参り、おかげでな浮きました。



文政十二己丑年十二月十日

近來諸寺院の僧侶一體風俗不宜候哉、道德殊勝の聞え在之輩は稀にて、不律不如法之沙汰而已のみ聞々相聞候。都て諸宗之僧徒、夫々作法も可有之所、畢竟本山亦是役寺觸頭等身分等閑成故之儀にて可有之候。以來本寺・役寺觸頭等にて、常々無油斷心ふじよほふを付、宗旨得達之僧侶を相すませ、聊も不如法成者、夫々科等も在之、配下の示教行届候様、專一に爲致可申候、尤本寺・役寺觸頭等の内にも、萬一不律不如法之聞在之者、勿論之儀、或は利欲に耽り、寺務の實意疎成歟、亦は一體其器に不當輩は、縦令大地本山の本院たりと云ふとも、聊無容赦嚴重に其沙汰可有之事に候。右の趣御沙汰に候間、篤と申談じ、夫々行届、不取締無之様可被致候。右の通寛政元酉年二月、從江戸被仰下候に付、其段攝河播二ヶ國迄爲觸知置候處、當表寺院の内、間々不如法の僧も在之趣相聞、於奉行所吟味之上、追々御仕置申付候得共、全本山之寺院、當表手遠にて、役寺・觸頭等之示教不行届、且不器量之僧猥に一寺住職致し候儀も在之由相聞え候に付、示教行届候様、若又以來如何之風聞有之



候は、追々引寄可懸吟味。尤役寺、觸頭並組寺等迄、可爲越度旨、當表諸宗役寺僧録・觸頭等へ申渡、右に付寺中は勿論、諸宗之僧不如法の儀、及見分候は、其處の者々可訴出候。萬一内證に致し置、後日に相聞え候は、急度可及沙汰旨、寛政十年十一月、大坂三郷町中へ相觸、其段當表寺院へも相達置候。後尙又同十一年八月從江戸被仰下候趣、並文化十四丑年七月にも町々在々へ爲觸知候處、忘却の輩も有之哉、近頃亦々行狀不宜風聞有之候に付、尙又爲觸知候間、觸渡の趣、彌無忘却可相守候。此上風聞不相止候は、急度可懸吟味候。此旨三郷町中可觸知者也。

丑十二月

伊賀山城

小組總年寄

右の御觸に驚き、俄に梵妻に暇を遣りし寺も有り。又京都其外知るべ有る方へ女を預けしも有り。中には頓著なくて其儘に打過ぎて、行狀宜しからざるも有り。一其罪を糺せば、行狀正しきは二三ヶ寺に過ぎざれば、一々に召捕り難く、右御觸

僧徒の非行

後に不埒なる寺々六十ヶ寺計り、夜中密に大鹽氏の宅に召寄せ、罪の次第篤と聞合せ、これを認めし封書を以て、夫々へ相渡し、申開きの筋あらば、開封の上返答に及ぶべし。表立つて吟味を遂ぐべきなれども、慙懼を以て此の如しとなり。坊主其次に下り、何れも之を開き見るに、各、身の上になせる業の悉く記し有るにぞ、一言の申譯なく、「恐入る旨」申すにぞ、「急度御咎の筋なれども、是迄の事をば内々になし遣はすべし。已後心得違の事之あるに於ては、罪科に處すべき旨」申聞かせ、許し返されしにぞ、何れも虎口を逃れたる心地にて、引取りしとぞ。かくても尙止まる事なき寺々を、去年の冬より春かけて、三十ヶ寺計りも御召捕になる。中にも、甚しきは天王寺にて一心寺、千日の慈安寺、生魂の曼陀羅院、北野にて大融寺・圓頓寺・善通寺・建國寺、其餘寺號を聞きぬれども、皆忘れたり。曾根崎新地藤井寺、其外所々の寺々、御手當を遁れ、逃失せしも多くありしとなり。圓頓寺は法華宗にて、無檀地なるが、堂島河内屋善兵衛といへる者、代々此寺を信じ、此寺河内屋にて相續をなせる事なるに、當時の善兵衛母五十計りを犯し、是迄寺の立行く程の事爲して貴



ひぬる上に、此母よりは迄數百金の金を取入れぬ。近き頃善兵衛方にて、百五十金紛失して、知れざるにぞ、賊の入りし事も覚えざれば、召使へる者に疑ひをかけ、大金の事なればとて、其旨相届けぬるに、間もなく圓頓寺召捕られ、後家の入牢にて、御吟味有りしに、後家より密に此坊主へ遣り、知らざる面にて公儀に届けなごせし故、邪淫の上、上をたばかりし罪重なり、坊主は邪淫せる上に、かゝる事して金を取りぬれば、工み事に落ちて、其罪を重ねぬといへり。善通寺は人の妻を犯し、これも金錢を取る。一心寺も梵妻より外に、重き罪ある由、其餘尼寺の住持、子兩三人も生めるあり、尤甚しきは、梵妻に、置屋・揚げ屋杯させ、己が娘を藝妓に出だし、男子には肴屋をさせぬる有りし。中にも高津下寺町に北山壽庵が碑あり、寺號忘れたり寺の南、筋向の寺も、梵妻不如法の事ある故、公儀より之を召捕りに行きぬるに、近邊の住持等大勢參會し、酒肉取り散らし、博奕を爲して有りしかば、思はざるに得物多く、寺中は素より捕へに參られしも、案外の事にて人數不足なれば、漸々と之を召捕られしとなり。

○國初ト  
ハ不都合  
ナル語ナ  
レドモ江  
戸幕府ノ  
初ノ頃ナ  
リ云ヘルナ

多田の満願寺は、大融寺にて開帳をなし、河内の壺坂は、大蓮寺にて開帳をなせしが、御蔭參りにて、これを見向く人さへもなかりし。然るに蒲満寺は、伊丹の先なる中山寺の麓にて、柳屋といへる茶店の娘を抱へ置きぬるを、小性に仕立て、男の姿にやつさせて、開帳中も之を連れ參りしに、寺々召捕られ、己が事も露顯せし事なれば、此娘を密に奈良の方へ預けしが、こゝにも置き難たければ、京の方に隠さんとして、密に連れ歸りぬる途中にて、兩人共召捕られ、入牢せしと云ふ。京都にて、妙信寺・智恩院・本國寺・黒谷其餘處々にて召捕られ、入牢のよし。近來人氣も悪しく、世間大に行詰りて、姦惡の事多かりしにて、刑罰を蒙り、剩へ國初已來、潛み隠れて行ひし切支丹の根葉もなく刈り盡し給ひ、又斯かる邪淫の僧侶迄、皆其罪に服して、萬民御代の有難き事を悦びぬれば、御蔭は參宮に限れるにも非ず。寺々不如法の事など此度の伊勢參りに與かれるにてはなしと雖も、神道盛にして火事ありなどとして、騒ぎぬる者もあるに、戲言番付の中にも、是等の事取込めて記せる



事など之あり。これを知らずは分き難き事もあれば、こゝにこれを記せるは、其事を分ち、御政道の正しきを、後の世迄も傳へぬる一つの端にもあらんと思へるにぞ、これを書いつけて置きぬ。

こは唯僧の事を云へれど、是のみに非ず。女色に限らず男色も世に害ある事多きものなり。夏桀の未喜、殷紂の妲己、周幽の褒姒、音獻の驪姫、吳王の西施、衛公の宣姜、何れ其害大なり。又周穆が慈童を愛し、衛靈の彌子瑕、漢高の籍孺、漢哀の董賢、唐韓の吏邦、孟郊、鄧通、安陽、皆男色の名あり。唐にてはこれを非道と云ひ、竺土にても其事なせる事にて大悲華經の中に、狎あふせんといへり。吾朝にては、若道、衆道など云ひて、弘法が弟真雅が曼陀羅丸業平の幼名に懸想し、光源氏、空蟬が弟小君に懸想せし事、文面に見えたり。其餘管阿兒、竹生島の童子、書寫山の乙若など之あり。古より女に限らず、男色の害尤甚しき事ぞがし。故に當書にも、頑童を近づくる事を戒む。僧の身にして五戒第一の邪淫戒を犯しぬる其罪、言を待たずして明らかなり。併

し僧のみにもあらず。世人之が爲に産を傷ふ者少なからず。故にこれを記せるも、子孫の心得べき事にあればなり。恐るべし慎むべし。穴賢あなかしこ。

天保二辛卯秋、御蔭年なりとて、専らいひはやせしに、早にて、種々の草木に病ひ付き、又は虫喰などせしを見て、御蔭の奇特なりとて、人々見物に行きける事のさうくしきを見てよめる。

讀人知らず

難波津に春は金の花をふらし秋は梢に實る饅頭綿さゝぎ玉に饅頭木になりて餅のならぬが不思議なりけりさゝぎ生りまんちうが生り綿がふく南蠻黍きびは伴天連がして所々に咲き諸人めづる芋の花はよからぬ事のありとこそ知れ桃櫻膠や蟲の巢かたまりてむせて毛立つと知らぬはかなさ時を忘れ所々に咲きぬる櫻花は枯るゝに近きものにぞありける汗盡きて油を絞る暑さには人も草木も病まざらめやは



暑さにて草木も痛みくさぐさの病める姿を何愛るらん  
 人毎に汗ば出来ぬはなかりけり是も暑さの御蔭なるらん  
 暑さにて草木もいたみ人もまた逆上せて出来る頭瘡まんぢう  
 暑さにてよこねがんさう綿がふき身に楊梅の花も咲きけり  
 予が庭前にも、松・紅葉等に、世間にていへる綿なる物出来ぬ。蘇鐵の玉といへる  
 其片端、外より予に贈りぬる故、後年の印に其物共を留め置きぬ。

浮世の有様 卷之二終

大正六年二月廿五日印刷  
 大正六年二月廿八日發行

國史叢書

浮世の有様 一

定價金一圓二十錢



編輯者兼  
 右代表者

國史研究會

印刷者

今村勝一

印刷所

榎山定吉

友文社

發行所

東京市牛込區市ヶ谷柳町二十九番地  
 振替貯金口座東京二七〇二四番

國史研究會



8116E



